

論文

文化人類学における「日本的自我」を読みなおす

——文化ナショナリズム批判を超えて——

飯田 未希

- I. はじめに
- II. 文化人類学的な「自我」
- III. ポスト植民地主義と文化ナショナリズム批判
 1. ポスト植民地主義批判と「表象の危機」
 2. 文化ナショナリズム批判と「日本人論」
- IV. 現在の日本を対象とする文化人類学の動向
- V. ディスカッション
- VI. おわりに

I. はじめに

この小論では、1980年代から1990年代を中心に論じられた日本を対象とした文化人類学における「自我」(self)に関する議論(以下「日本的自我」)を理論的に位置づけなおし、この議論の現在における意義を問い直したいと考えている。1970年代に強まった西洋中心主義批判を受けて文化人類学では諸概念の見直しが進められ、「自我」を含めた心理領域をそれぞれの文化の実情に合わせ概念化する必要性が盛んに論じられた。「日本的自我」の研究もこの問題意識を受けて始まっており、その過程でいくつかの重要な概念が提出された。ここで紹介する「相対的な丁寧さの度合い」(relative degrees of politeness)もその一つである。「相対的な丁寧さの度合い」という概念は日常的な言語使用およびふるまいにおける「丁寧さ」の使用に焦点を当て、言語使用と相互作用を綿密に分析することで、「丁寧さ」の使用が社会関係の状況的な構築において重要な役割をはたすことを示した。

しかしながら、「相対的な丁寧さ」を含めた「日本的自我」の研究は、1990年代以降強まったポスト植民地主義や文化ナショナリズム批判などによって問題化され集中的に批判された。このため、これ以降「日本的自我」で提出された論点を研究することが困難な状況が生まれ、現在に至っている。本論で筆者が問いたいのは、ポスト植民地主義や文化ナショナリズム批判による批判が、「日本的自我」の研究すべてを否定するための妥当性を十分に備えているかどうかという点である。このため本論では、現在はあまり知られていない文化人類学における「日本

的自我」の研究を紹介し、その理論的背景をまず説明したい。その後、「日本的自我」に対する2つの立場からの批判的議論（ポスト植民地主義／文化ナショナリズム批判）を紹介し、「日本的自我」批判以降の日本を対象とした文化人類学的な研究の動向を説明する。最後に「日本的自我」の研究を通して提出された理論的論点を現在の研究動向と比較し、その意義を考察したい。

Ⅱ. 文化人類学的な「自我」

文化人類学において心理的な側面が文化的にどのように構成されるかという問題は古くから議論されてきたが、哲学や文学における西洋中心主義批判の流れを受けて、1970年代から心理領域への新たな関心が広がった。「自我」(self)という概念は、文化人類学のコンテキストでは「人格」(person)という概念と区別されてきた。前者が「内面」的な感情を指すのに対し、後者は社会的な役割など「外面」的なものを指す(Kondo 1990)。この時期、文化人類学の全般的な傾向として、西洋的な個人主義に基づいたカテゴリーを非西洋諸国の文化に当てはめることへの反省から、それぞれの文化における心理領域に関する概念を調べ、「自我」が社会的に認識され構築されるプロセスを描こうと企図する議論が生まれた。「自我」への関心は、異なった文化において「心理的な領域」がどのように異なった形で認識されるのかを説明しようとするものであった¹⁾。

西洋の心理学や社会科学全般では、伝統的に理性と感情は明確に区分され、両者は対立的な関係として位置づけられてきた。そして、前者(理性)は社会的なもの、後者(感情)はより個人的なものともみなされ、公的な領域と私的な領域の区分として位置づけられてきた。このように西洋の社会科学は「社会的なもの」と「個人的なもの」を二項対立とみなすと同時に、後者(個人)は前者(社会)を受容し内面化することを想定してきた。この「社会的なもの」を内面化した「個人」が文化人類学では「人格」と定義され、「個人」の中の「残り」の領域が「自我」という感情領域であると想定されてきた。そして、従来、分析の焦点が「人格」にあったため、心理的・感情的なものに対する認識および概念化が不十分であったのではないかという反省が生まれた。このため、社会対個人、理性対感情という西洋的な排他的二項対立に基づいた心理領域の定義を用いずに、それぞれの文化において心理的な領域がどのように認識されているかを概念化しようという試みが盛んになった²⁾。文化人類学の歴史においては、この「文化的な自我」という議論はそれ以前との断裂というよりは、文化の個別性と相対性を強調するアメリカ的な伝統の延長上にあるものであったといえるだろう(LeVine 1991)。「日本的自我」の議論も、このような文化人類学の当時の関心を反映したものであった。

1980年代から1990年代ごろまで議論された「日本的自我」は様々な論者が異なった観点から議論を展開しており、必ずしも一貫した理論的土台や論点が共有されていたわけではなかった。ただ共通の関心として、①心理や感情という領域が日本においてどのように構造化されているか、②それが社会での人間関係のあり方とどのように関係しているか、という2点の問題意識を共有していたといえるだろう。このようなある種雑多な観点から議論された「自我」の議

論の中に、言語使用やふるまいなど相互行為の観察を通じて、心理領域を概念化し記述しようという試みがあった。ジェーン・バチニク（Jane Bachnik）やドリーン・コンドー（Dorinne Kondo）らを中心としたグループによる活動がこれにあたる（Bachnik 1992; Bachnik and Quinn 1994; Kondo 1990; Rosenberger 1992）。彼女らの著作は当時の日本の「自我」に関して文化人類学で議論されていた論点を、それぞれに異なった形で総合し掘り下げている³⁾。彼女らの議論には現在からみても重要な論点がいくつもあるが、その中でも特に私が有益であると考えるのが「相対的な丁寧さの度合い」（relative degrees of politeness）という概念である。この概念は社会関係そのものをいかに記述し、その構造を概念化するかという問題意識から生まれた概念枠組みであり、言語構造、言語使用、そして相互作用の関連性を捉えることを目的としている。

「相対的な丁寧さの度合い」は相互作用のなかで人々が用いる「丁寧さ」が、行為者間の相対的な「距離」（垂直・水平2方向における「近い／遠い」）を表すものと考え、「丁寧さ」の使用を通じて行為者が他の行為者と自己との関係をどのように位置づけるかを観察する。「自我」の議論以前の日本社会の文化人類学的な議論においては、日本における対面的な相互行為の特徴は「敬語」という観点から説明されてきた。「敬語」とは接頭辞、接尾辞、動詞の語形変化などに表れる言語的な特徴である。当時の文化人類学的な議論では日本社会は「階層社会」（hierarchical society）であると考えられ、「敬語」はそのような社会における上下関係を重視する価値観を「反映」するものであると考えられた。

「敬語」という枠組みは、敬意と謙譲という上下関係を表す言語的特徴を重視するものであった。これに対し「相対的な丁寧さ」は言語使用やふるまいにおける関係のあり方を、垂直（上下）方向と水平方向における人間関係の「距離」という観点から定義した。言い換えると、①「丁寧さ」は相互行為の相手や相互行為で言及される第三者に対し、行為者が持つ心理的な距離感を表すものであり、②「丁寧さ」の度合いを通じて相互行為の相手や言及される第三者との関係に対し、行為者は意味づけを行うと定義されたのである。「丁寧さ」の度合いが高い場合、相手との距離感が「大きい」（「遠い」）ことを表し、度合いが低ければ、相手との距離が「小さい」（「近い」）ことを表す。この意味で、「丁寧さ」の度合いという概念は、「丁寧」な言葉やふるまいのみを対象とするのではなく、一般に「丁寧ではない」とみなされる言葉やふるまいも「丁寧さの度合い」の一部として考える。「もっとも丁寧」と「もっとも丁寧でない」という二つの極間のスペクトラムとして、あらゆる言語行為およびふるまいを位置づけているのである⁴⁾。

「丁寧さ」というと「言葉の飾り」、すなわち言葉の「メッセージ」という本質に対し、付属物であると考えられがちである。しかし、「丁寧さ」は単なる美化された言葉や虚飾的なマナーではない。日本の相互行為においては「丁寧さ」は不可欠な一部であり、社会関係が状況的に構築される基礎である。これは「丁寧さ」のインデックス性と関係している。インデックス性とはパースの記号論で定義された言語の特徴の区分のひとつで、明示的な指示対象を持たず、意味が相互行為のコンテキストで決定されるようなタイプの言語のことであり、言語構造と相互行為のコンテキストを接続する働きがある。通常、「ここ」、「そこ」、「わたし」、「あなた」などの指示語や人称代名詞がこのようなインデックスの例とされるが、バチニクらは日本の言語

使用における「丁寧さ」もこのインデックスと考えられるとした (Bachnik 1992; Kondo 1990)。

「丁寧さ」がインデックス的であるというのは、ある特定の表現が「丁寧である」かどうか、他の行為者の行為や言語使用と比較して決まるということである⁵⁾。例えば、ある人が「おはようございます」と別の人に声をかけた場合、後者が「おはよう」と返した場合は両者を比較して前者は「より丁寧」(「より遠い」)となる。これに対し、後者がより丁寧にお辞儀をしながら「おはようございます」と返した場合は後者の方が「より丁寧」となるだろう。このように「丁寧さ」とは個別の表現に内在する価値ではなく、他の表現との比較(差異)において価値を持つ側面が強く、その「価値」(度合い)は言語行為やふるまいが起きているコンテクストに依存する。この意味で、「丁寧さ」は常に他の行為者との比較を呼び起こすものであり、比較を通して心理的な距離感を生み出す可能性がある。行為者が強く意識するかどうかにかかわらず、「丁寧さ」を通じた比較軸は常に状況的に生み出される。この意味で、「丁寧さ」は関係のあり方やその意味づけに本質的にかかわっているものである⁶⁾。

「丁寧さ」を距離の感覚と定義することで、自他関係がどのように位置づけられるかだけでなく、集団の線引きや上下関係の序列が、言語使用やふるまいを通じてフレキシブルかつダイナミックに状況的に形成されることが観察された (Bachnik 1992; Bachnik 1994; Kondo 1990; Rosenberger 1994; Iida 2008)。この「丁寧さ」モデルは以下の3点において非常に重要な理論的および実践的な意義を持っていた。まず第1に、このモデルは、それ以前の「内面化」モデルをいったんカッコに入れ、観察を重視したことである。先にみたようにそれまでの文化人類学では、「心理領域」は個人が社会的な価値観や規範を「内面化」するという前提によって定義されていた。価値観や規範を「内面化」したものが「人格」という理性的、公的な領域であり、その残滓が「自我」という感情領域であるとみなされていたのである。この二項対立的なモデルの問題点は数多くあるが、中でも重要なのが①共有された価値観を「内面化」するという前提のため、社会を生きる人々を極度に同質的なものとして想定すること、②実際の人間の行動は内面化された価値観の「反映」として二次的な位置づけになること、の2点である。このため、「人格」/「自我」という二項対立を用いずに日本社会での「心理領域」の構成のされ方を理解するためには、まず「価値の内面化」という前提を避け、より動的な形で相互行為を観察し記述することが重要であると考えられるようになってきた。言語を含めた綿密な観察を行うことになったのはこのためである。この意味で、観察の重視はそれ以前の二項対立に基づいた「内面化」モデルを乗り越えるための重要な学問的実践だったのである。

第2点として、言語構造、言語使用および相互作用を綿密に観察することによって、「丁寧さ」は内面化された価値観の「反映」ではなく、むしろ「丁寧さ」の使用を通じて人々はお互いの関係をアクティブに意味づけていることが理解されるようになった。「丁寧さ」の比較を通じて、人々は集団の境界(内部者/外部者)や上下関係、親密さや疎遠さという関係のあり方について常に意味づけを行っている。また、表面的な役職やメンバーシップと単純には対応しない形で、「丁寧さ」が用いられる場合があることも観察されている。一般的に期待される社会的役割と行為者の意味づけとのズレが、言葉の「メッセージ」レベルではなく、丁寧さの度合い(丁寧さの「ズ

レ)を通じて示されることがあるのである (Bachnik 1994; Kondo 1990; Iida 2008)。人は単に社会的役割や、地位、集団のメンバーシップによって言葉遣いやふるまいを制限されているだけでなく、「丁寧さ」の使用を通じて、役割や地位などに対して重層的に意味づけを行うこともできるのである。

第3に、この「丁寧さ」の枠組みの重要性は、言語使用および相互作用という日常レベルの文化の拘束性と創造性という両面を示したことである。これ以前の「価値観の内面化」という枠組みは、拘束的な観点からのみ日常レベルの文化を定義していた。これに対し、「相対的な丁寧さ」は、相互行為を規定すると同時にその中で新たな意味や行為を生成するという両面的な働きをするものとして定義された。一方で「丁寧さ」は日本語においてはそれなしには済まされないものであり、相互行為を規定し束縛するように働く。「おはようございます」の例でみたように、日本語の相互行為において「中立的」な表現や行為は存在しない (Smith 1983; Kondo 1990; Bachnik 1994)。ひとつの行為は、常に他の行為者の言語行為やふるまいとの比較を生み出し、それらとの関係において位置づけられるのである。この意味で、「丁寧さ」は決定的に言語使用および日常的なインタラクションを規定している。行為者が意識する、しないにかかわらず、また望む、望まないにかかわらず、「丁寧さ」という観点からの比較とそれによる距離の感覚は日本語での相互行為や関係の構築を制約するように作用している。しかしながら、規定性は単に束縛的に働くものではない。このような比較の尺度を通じて、人々はアクティブに自他関係を評価し、それを意味づけ関係を構築するよう働きかけることもできる。集団の区分や地位の違いなどのフォーマルな線引きとは対立する形で、行為者が「丁寧さ」を通じて心理的な距離感を付与し、自他関係に対する自らの定義を主張していることがしばしば観察されてきた。「丁寧さ」の使用は両面的な社会实践であり、制約的に作用すると同時に、意味を生み出す生成的な作用も持つものである。

このように「日本的自我」の研究は、言語使用を含めた相互行為を綿密に観察し、文化を動的なプロセスとして概念化し記述する方向に進んだ。先に見たように1970年代以降の文化人類学では西洋中心主義批判が進み、「人格」／「自我」というそれまでの文化人類学における二項対立を避けて「心理領域」をいかに捉えるかという問題意識が生まれた。そして日本を対象とした文化人類学においては、「人格」という価値の内面化を重視した枠組みを乗り越えるため、相互行為そのものを観察することが重視された。この結果、文化を動的なプロセスとして相互行為の中に位置づけ、制約的であると同時に生成的な社会实践として捉える枠組みが生まれた。これが「相対的な丁寧さの度合い」であり、人々が相互作用の中で自他関係に対して行う意味づけ行為を、インデックス性という観点から概念化することを可能にした。しかしながら「はじめに」で述べたように、現在は文化人類学における「日本的自我」の研究全体が顧みられない傾向にある。次節以降はこの議論が重視されなくなった理論的な背景や論争を説明し、現在における「日本的自我」の研究の意義を説明したいと思う。

Ⅲ. ポスト植民地主義と文化ナショナリズム批判

上で見たように1980年代から1990年代にかけての日本を対象とした文化人類学では「日本的自我」に研究の焦点が当たっており、この議論をベースにした人類学的なフィールドワークが数多く行われた(Bachnik 1992; Bachnik 1994; Kondo 1990; Rosenberger 1994)。しかしながら、この時期は同時に文化人類学の学問的な方法や理論の前提について、重大な異議申し立てが2つの方向から起きた時期でもあった。この異議申し立てのため、日本における文化人類学的な「自我」の研究は事実上ストップすることになった。異議申し立ての第1点は、ポスト植民地主義やポストモダニズムの影響を強く受けた批判的議論であり、いわゆる「表象の危機」(crisis of representation)と呼ばれる現象を引き起こした。この批判は文化人類学の伝統的な方法論や学問制度のあり方全体を批判したが、日本を対象とした文化人類学的な「自我」の議論に対しても当てはまるものであり、その趨勢も強く影響を受けた。異議申し立ての第2点は、マルクス主義やポストモダニズム、ポスト植民地主義などの議論の影響を強く受けた東アジア研究者からのものである。彼らは文化人類学全体ではなく日本を対象とした「自我」の研究に対して、主に「文化ナショナリズム」という観点から批判を行った。文化人類学全体に対する批判と東アジア研究からの日本を対象とした文化人類学への批判という2つのレベルの批判が起こった結果、文化人類学における「日本的自我」の研究を継続することは非常に困難になった。この意味で、この時期の文化人類学批判がどのような論点を持っており、「日本的な自我」の議論を否定するのに十分な論理性を持っていたのかどうかは再検討する必要がある。このため、このセクションでは批判的な議論を「日本的自我」の議論との関連において短く概観したい。

1. ポスト植民地主義批判と「表象の危機」

よく知られている文化人類学における「表象の危機」の議論は、主に①民族誌、およびその書き手である文化人類学者と、②民族誌によって「他者」として表象される「ネイティブ」という関連した2つの側面を問題化した。第1点目の民族誌およびその書き手の問題については、当時のヨーロッパで行われていた構造主義、ポスト構造主義およびポストモダニズムの議論がアメリカの文学研究を中心に受容されたというコンテキストが重要であった(Rees 2008)。クリフォード・ギアーツ以降のアメリカの文化人類学においては解釈学的なアプローチが主流になっており、文化人類学者は客観的な「科学者」であるというよりは主観に縛られた「作家」に近い存在であることが強調されるようになった(Geertz 1973; Rees 2008)。文化人類学者の視点に偏りがあることを認め、観察される人々が解釈を行うコンテキストを可能な限り忠実に民族誌に再現し、多様な視点をとりこむ「厚い記述」(thick description)を行う必要性が論じられた。

ジェームス・クリフォードらによる民族誌の問題化(Clifford and Marcus 1986)は、ギアーツによってはじめられた文化人類学の解釈学的な相対化を徹底的に推し進めるものであったといえるだろう。クリフォードらは、民族誌は文学のひとつの「ジャンル」(文学形式)であるとみなし、その「レトリック戦略」を問題化した。ギアーツ以降、文化人類学者の主観性に疑問が

示されているにも関わらず、文化人類学者が観察対象について語る権威（authority/ authorship）は失われていない。この原因を、クリフォードらは民族誌という文学形式の物語構造のためであると考えた。つまり、外部からの観察者である文化人類学者が「ネイティブ」について語る事が、いかに民族誌という文学形式を通して自然化され正当化されるかを指摘したのである。さらに、長期の参与観察のなかで民族誌を書くという作業を文化人類学という学問分野の根幹に据えることによって、民族誌は文化人類学という学問制度そのものを支えていると指摘した。民族誌を書くという文化人類学者の中心的営為が問題視されることによって、長期間の参与観察によって言語や文化の総体を学ぶという文化人類学の伝統的な学問実践に疑義が提出されることになった。

「表象の危機」の2番目の問題は、文化人類学の民族誌が、「ネイティブ」を「他者」として表象してきたという点についてである。この問題は、先に述べた文化人類学者の「書く」作業と関連している。しばしば動詞的に「他者化」（othering）として言及されるこのような表象行為は、書き手である文化人類学者（伝統的に「西洋」）と観察対象（伝統的に「非西洋」）との関係を、相互に排他的であり、まったく対極にあるものであると認識し記述するものである（Clifford and Marcus 1986; Kondo 1990）。この際、対象の構築のされ方は①内部的な多様性の欠落（共時性）と②歴史的な変化の欠落（通時性）という2つの軸において本質主義的な傾向を持つ。もう少し正確に言うと、文化人類学的な参与観察に基づいた民族誌においては、以下の5点の相互に規定的な前提を持つ傾向が強い。

- ①当該社会を同質的（homogeneous）で一枚岩的（monolithic）なものとして描き出す。社会内部の利害の対立はない。
- ②文化はすべての社会の成員に同じように共有（内面化）されている。
- ③社会は閉じていて、ほかの文化の影響は受けない。
- ④フィールドワーカーが観察する文化は、昔から同じ形で共有されており変化はない（時間性）。
- ⑤一つのフィールドワークでの観察が、当該社会全体に当てはまる（一般化の可能性）。

民族誌ではこのように非西洋社会を内部対立がなく価値観が共有され、歴史的变化のない同質的な社会という暗黙の前提を出発点として記述を行ってきた。非西洋の社会像は、近代化と個人主義化という観点から定義される西洋社会のイメージとは正反対であり、この対比は学問的な領域の区分にも影響している（Kondo 1990）。社会学が西洋社会、産業化以降の社会を対象とするのに対し、文化人類学は非西洋社会、産業化以前の社会を研究対象としてきた。「他者化」を批判する議論は、このような排他的な二項対立による社会像の構築によって、非西洋社会の中の多様性や変化、そして西洋社会と非西洋社会の歴史的な関係が不可視になることを問題としている。

先に紹介した文化人類学的な「日本的自我」に関する議論は、非西洋社会への西洋的なカテ

ゴリーの押し付けを批判する相対主義的な試みであった。西洋的な理性／感情という二項対立やそれをベースにした「内面化」モデルを排し、相互行為の観察から日本における心理領域の特徴と関係の構築のプロセスを記述することを目的としていた。「日本的自我」の議論以前は、社会のなかで共有された価値観を人々が内面化することが前提とされ、社会は同質的な人々の集団としてイメージされていた。「内面化」モデルをいったんカッコに入れ、観察から始めようとした「日本的自我」の議論は、この観点からすると「本質主義」をむしろ乗り越えようとする試みであったといえるだろう。

しかしながら、「日本的自我」の議論は西洋社会／非西洋社会という排他的な二項対立を前提として非西洋社会の観察を行う傾向にあったこともまた否定できない。「日本的自我」の議論においては西洋社会と非西洋社会の相違点を強調し、西洋的なカテゴリーの「押し付け」が不合理であり日本の実情に合わないことを説明する傾向にあった。このため、文化人類学における「日本的自我」の議論は、ポスト植民地主義的な観点からは「対象の他者化」を行っているともみなされ否定的に評価されることになった（Kondo 1990）。

2. 文化ナショナリズム批判と「日本人論」

上記のポスト植民地主義批判と並行して、この時期には日本を対象とした文化人類学に対してやや異なった角度から批判が行われた。文化人類学的な「日本的自我」の議論は、いわゆる「日本人論」と呼ばれる日本人による「日本文化」に関する議論を読み、その一部を「自我」の議論の基礎的な概念として取り込んでいた。特に重要であったのは中根千枝（1967）、土居健郎（1971; 1985）などの著作であり、彼らの議論は広く読まれ、批判的に応用されながら観察可能な形に概念として整備されていった。「ネイティブ」が「ネイティブ」自身の文化について語るというジャンルやマーケットが存在し、それが「非ネイティブ」が行う文化人類学の研究に影響を与えるというのは、日本独特の環境であった。この「日本人論」との深いかわりのため、「日本人論」に対する批判が強まると、それを理論的な基礎としている文化人類学における「日本的自我」の議論も批判されるようになったのである。

日本を対象とした文化人類学と他の非西洋社会を対象とした文化人類学との大きな違いは、日本には日本の文化を研究対象とする日本人の知識人層が第二次大戦以前から存在しており、戦後はこれに海外で訓練を受けた文化人類学者、民俗学者など多様な人々が議論に加わったことである⁷⁾。さらに、日本にはもともと出版文化が存在しており、戦前からの出版の産業化によって広範な出版市場が存在していた。このため、日本では日本を対象とした文化人類学的な議論は単に外部からの観察にとどまるのではなく、観察された人々自身が観察の記録を読み、批判し、さらに自分たち自身で自分たちを観察し記述するというプロセスが生まれたのである。このような出版環境の存在により、「日本文化」を論じる状況は文化人類学における非西洋社会の「他者化」の問題とは大きく異なったものとなった。すなわち「ネイティブ」が書いたものをさらに非-日本人の文化人類学者が議論し、後者の分析概念として使用する、というプロセスが生まれたのである。この意味で、「非ネイティブの文化人類学者」対「ネイティブ・インフォーマ

ント」という植民地主義批判で問題化された構図は、日本においては弱かったと考えられるだろう⁸⁾。

しかしながら、このようにして出版された一連の著作は、主に1980年代以降、東アジア研究などの分野で「文化ナショナリズム」として激しく批判を受けることになった。「日本人論」は、文化ナショナリズム的かつポピュリスト的な出版商品であり学術的な著作ではないというのが、東アジア研究者らによる批判以降の一般的な見方である。このため「日本人論」という言葉自体も、批判的かつ蔑視的なニュアンスを多分に含んだものとして使用されている。先に述べたように文化人類学における「日本的自我」の議論は「日本人論」と呼ばれる議論の一部を参照しているため、「日本人論」と同じカテゴリーであるとみなされ、批判を受けることになった。

「日本人論」批判は主に2つの観点から行われた。第1点目は、明らかにこの議論が本質主義的であること、すなわち「日本文化」という仮想された全体性の中の差異を認めず、また歴史的な変化も認めないことを問題とした（Robertson 2005; Sakai 1997; Ivy 1995）。「日本文化」はすべての「日本人」によって同じように共有されることを前提とし、地域差や階層差などは想定されない。もしそのような差異を想定する場合でも、「日本文化」という文化の同質性、共有性を脅かすものではないことが自明となっている。さらに、極度に単純化された「西洋」（もしくは「アメリカ」と「日本」との違いを排他的な二項対立として強調し、両者の文化の共通性を認めない点も問題視された。「西洋文化」のミラーイメージとして「日本文化」の特徴が語られているということである⁹⁾。

批判の第2点目は、これらの「日本人論」は大衆迎合的な出版文化におけるナショナリズムであるという批判である（ベフ 1987; 吉野 1997; 吉見 1998）。これらの一連の著作は、戦前に構築された日本人像が敗戦によって否定された日本社会において、「日本人とは何か」を示すことになった。そして、戦後の日本において「日本」および「日本人」とはどのような存在であるかというある種の集団的な自己認識を構築する中心的な役割を果たしてきたと指摘された。特に、このジャンルは商業的に成功するために、読者大衆の「好み」を反映したものとなっていると考えられている¹⁰⁾。「日本人論」とカテゴリー化される議論の多くは、当時の社会的なムードを色濃く反映しており、分析枠組みや概念にもそのような価値観が織り込まれているものもみられる。このような意味で、「日本人論」をジャンルという総論としてみた場合、学問としての中立性に疑問が提示されていることはある程度当然と言えるだろう。

この文化ナショナリズム批判は主に「日本文化」について語る「日本人」に向けられたものであり、セクション III.1 のポスト植民地主義批判とは「語りの主体」が異なっている。ポスト植民地主義批判は西洋による非西洋の「他者化」、すなわち西洋の文化人類学者が非西洋文化を「語る」ことにより、非西洋文化を本質主義化し、かつ文化的に領有することを問題としていた。これに対し、文化ナショナリズム批判は「ネイティブ」が「ネイティブ」の文化について本質主義的に語ることを問題としており、この構図の中では、主に欧米出身の文化人類学者の位置づけは曖昧であった。しかしながら、文化人類学における「日本的自我」の研究は、中根千枝、土居健郎など「日本人論」と分類される著作の一部を積極的かつ批判的に再解釈しながら議論

の一部として取り込んできた (c.f. Kumagai 1981)。このため、「日本人論」に批判的な論者は、文化人類学における「日本の自我」の研究も「日本人論」と同一のカテゴリーとして分類する傾向にある。したがって「日本人論」に対する批判が高まると、「自我」の議論も同じ批判を受けることになったのである。

IV. 現在の日本を対象とする文化人類学の動向

上記のようなポスト植民地主義や文化ナショナリズム批判などの議論を受けて、現在の日本を対象とした文化人類学においては、本質主義や文化ナショナリズムを極力排除しようという傾向が強まっている。主に以下の4点が新しい文化人類学的研究によくみられる傾向である。これらの4つの傾向は排他的なものではなく、1つの研究の中に以下の4つの側面すべてが反映されている場合もある。いずれにせよ、これらは「日本文化」という本質主義的なカテゴリーの解体を志向するものである。

- ① 「日本」および「日本文化」というカテゴリーの脱構築：「日本」や関連したカテゴリーの歴史的な構築を描き、「日本」や「日本文化」、「日本語」など、「日本人論」で自明化されてきた枠組みを正面から問題化する議論である。これには、(a) 近代化による「伝統の発明」、すなわちナショナルアイデンティティの構築 (c.f. Vlastos 1998; 吉野 1997)、(b) マルクス主義的な支配文化批判 (c.f. Miyoshi 1991)、(c) ポスト植民地主義、ポストモダニズムなどの観点からの言説分析 (c.f. Ivy 1995; Sakai 1997; Robertson 1991) がある¹¹⁾。
- ② 「日本」という地理的な領域内における多文化の強調：これまで「日本文化」は「日本」という国家の地理的な境界に対応することが暗黙の前提として語られてきた。これに対し、新しい議論では「日本」という地理的な境界内に、単一の「日本文化」しか存在しないのではなく、多様な文化が存在することを強調する (c.f. Denoon et al. 1996; Lie 2001; Weiner 1997)。特に周縁化された文化 (アイヌ、沖縄、在日韓国・朝鮮人など) へ着目し、それらの文化が「日本文化」から排除されてきた政治経済的な関係を歴史的な観点から説明する場合も多い。この議論枠組みにおいては、「文化」は主にアイデンティティの形成の問題であり、マジョリティとマイノリティという力関係の一部として理解される傾向にある。すなわち現在は「マイノリティ」的な立場におかれている民族グループが、(a) 近代日本が成立する過程でいかにその「周縁」と位置付けられ、「日本」との関係において定義されてきたか、そして (b) 周縁化された人々自身がそのような意味づけをどのように受け止め、対抗していったかが論点となる場合が多い。
- ③ 「文化研究」(cultural studies) への接近：従来の文化人類学は小規模社会に長期間滞在し、言語を含め文化的な慣習、価値観、規範などを参与観察を通じて体験的に理解する

ことを要求してきた。これに代わって主流になりつつあるのが、文化研究的なアプローチである。研究対象はマスメディア（雑誌、マンガ、テレビなど）や劇場、そのほかの消費文化（ファッション、化粧など）など、現代の産業化およびポスト産業化社会の文化を対象とする傾向にある（c.f. Skov and Moeran 1995; Moeran 1996; Miller 2006; Allison 1996; Imamura 1996; Robertson 1998）。文化研究的アプローチは従来の民族誌では直接の分析対象にならなかった、3つのポイントを分析に取り入れている。第1にマクロレベルの分析を行い、その中に分析対象となるメディアや消費行動などを位置づけている。第2に歴史的な変化を重視する。第3点として、消費、階級、イデオロギー、テキスト、ジェンダー、セクシュアリティなど文化人類学以外の学問分野で構築され使用されてきた理論や概念を積極的に分析に使用している。

- ④より広い文化圏の中での比較社会的研究：従来「日本文化」の特徴と考えられてきたものが本当に日本に特有の現象であるのかを、他文化と比較することによって検証する（c.f. Robertson 2005; Hendry and Watson 2001）。東アジアにおける「家族構造」の共通性と違いや、「丁寧さ」の環太平洋地域における共通性と違い、などの例がある。このような議論においては、脱コンテクスト的な枠組みで文化的な特徴の比較を行う傾向にあり、それ以前の文化人類学で重視された「文化の相対性」という観点は強調されない¹²⁾。

以上のように、「日本的自我」批判以降の新しい文化人類学では、西洋と非西洋との対比の強調や「日本文化」の単一性、超歴史的な同一性の想定などを問題化する観点を持つものが多く、植民地主義批判、文化ナショナリズム批判をとりこんだ形で議論を立てる傾向にある。②の「マイノリティ文化」や④の比較社会の方向性は、従来「文化」と「社会」が互いに重なり合うものとして概念化されてきたことを問題化する視点をはらんでいる。ひとつの社会にひとつの文化が存在するという暗黙の想定は、社会の外延そのものが歴史的に変化し、その領域内に含まれる人々も変化していることを不可視にする。「マイノリティ文化」への着目と、比較文化的考察は、文化と社会の外延の対応関係を問題化する逆方向からの批判的なアプローチであるといえよう。また③の消費文化やメディアなどの現代文化の分析は、文化の中でももっとも変化の速い側面に焦点を当てることで、物質的および非物質的な文化の変化と人々の意識や行動の変化の関係を分析している。先に見たように、「日本的自我」およびそれ以前の日本を対象とした文化人類学においては、「日本文化」の単一性や歴史的な不変性が暗に想定されていた。この想定を問題化し、文化を歴史的な変化の中で捉えようという意識がこれらの新しい議論には存在している。

V. ディスカッション

現在の文化人類学的な議論は、全体として「日本文化」などのカテゴリーの仮想された同一

性を脱構築する方向に向かっている。そして文化人類学的な「自我」やそれ以前の文化人類学の伝統的な手法に基づいた研究に対する関心は低くなっており、特に「日本的自我」に関する議論はカテゴリー全体として否定されている。しかしながら、このような批判自体も批判対象の議論枠組みを単純化し矮小化することによって、自らの論点を狭めているのではないだろうか。また、これらの批判的な議論は様々なレベルの問題を混同する傾向にあるため、社会や文化を考える上で一般的に考えられるべき論点が論理的および理論的観点から検討されることを困難にしている。むしろこれらの批判的な議論自体も論点を整理し、見直される必要がある。私の立場から整理すると、次の2点が再考されるべきであると考え。まず第1にこれまでの批判は、「日本的自我」やそれ以前の日本を対象とした文化人類学の議論全てを否定するために十分な論理性を持っているか、第2にセクションIIで紹介した「日本的自我」の議論と、セクションIVで紹介した新しい文化人類学の研究動向は排他的か、の2つのポイントである。

1. 批判的議論は「日本的自我」の研究を否定するのに十分な論理性を持つか？

ポスト植民地主義批判や文化ナショナリズム批判による批判は、日本を対象とした文化人類学における「自我」の議論や、それ以前の議論を否定するのに十分に論理的であるだろうか？両者の批判における主なポイントは、①本質主義批判、②表象行為、③大衆文化としての「日本人論」、の3点であった。それぞれについて、見てみよう。

①「本質主義」は文化に関する議論全体を否定するか？

「日本人論」や「日本的自我」の議論は「一部の観察から全体について語る」という意味で、「過度の一般化」(overgeneralization)を行っている。すなわち、一部の「日本人」の観察から、「日本文化」全体についての言明を行っているのである。これは方法論的な問題であり、「日本人論」や文化人類学の伝統的な手法だけでなく、ミクロ社会学などもこの傾向を共有している。

これまでの文化ナショナリズム批判やポスト植民地主義批判においては、このような過度の一般化は「本質主義」であるとみなされてきた。一部の観察から全体へという一般化を行うことにより、対象社会が同じ「本質」を共有した「同質的」な社会としてイメージされることになるからというのが、その理由である。さらに、文化ナショナリズム批判の観点からは、このような「本質主義的」な文化像を提供することは、「文化ナショナリズム」であるとみなされている。特定の国家に属する全ての集団を同一的なものとして語ることにより、結果として階級など国家に内在する差異を不可視にするからというのが、その理由である。

しかしながら、この批判的な議論には、私は3点疑問を覚える。まず第1に、方法論的な「過度の一般化」は「本質主義」であり、さらに「文化ナショナリズム」であると本当に言えるのだろうか？ここに想定されている一連の等価関係には論理の飛躍がないだろうか？この種の批判が繰り返されてきたため、文化的な特徴を分析する行為そのものがナショナリ

ズムであるという見解が、日本を中心とした言説空間では自明視されている。しかしながら、文化的特徴の分析は様々な（政治的な）立場からの分析が可能であり、上記の等価関係は必ずしもいつも成立するわけではない。

第2点目として、あるモデルが「過度の一般化」を行っているかどうかは、モデルを作り、それを観察でテストするしか確かめる方法はない。現在の文化ナショナリズム批判のように、モデルを作る行為そのものを批判するのは、反駁の仕方としては誤っているのではないだろうか。

第3点目の疑問として、「過度の一般化」という方法論的な過ちを犯した論文ないし著作が、その分析の全てを否定される必要はあるのだろうか？論者が指摘する論点が「日本人全体」には当てはまらなくても、一部の社会集団に当てはまる可能性は否定できない。また現在の価値観や習慣とは異なっている、観察された当時（1960年代から1990年代）のある社会集団の特徴とは近似している可能性もある。「過度の一般化」という方法論的な問題によって「日本的自我」の研究や「日本人論」というカテゴリー全体の価値を否定する議論の進め方は、論理構成が乱暴すぎるのではないだろうか。

②表象行為の問題化

ポスト植民地主義、文化ナショナリズム批判の両方において、文化を表象するという行為が問題化された。ポスト植民地主義批判においては、文化人類学者が観察対象の社会の人々を「他者」として描き出す「レトリック戦略」が、彼らの語り手としての客観性や文化的領有を可能にするものとして問題化された。また、文化ナショナリズム批判においても、「日本文化」を「表象する」(represent/ representation)日本人研究者が、語りを通じて「日本人」を「代表する」(represent)立場に自らを置くことが問題視された。両方の批判において、文化について語ることで「語り手」が得る権威が問題となったのである。このため、これらの批判的な議論では、特定の文化について通暁しているという立場からの語りは、「ネイティブ」であろうと「非ネイティブ」であろうと批判的に見る傾向にある。しかしながら、この「語り手」の問題化は、議論として問題がないのだろうか？

このように「語り手」の「権威」を問題化する議論に明らかなのは、それが社会構造における「決定論」的な立場であるということである。すなわち、(a) ある立場から語る人々は、その立場 (position of speaking) を成立させている社会的な権力関係から免れえず、(b) 彼らの語りはその立場を「反映」したものであり (イデオロギー性)、また (c) 彼らの語りは彼らの立場を強化するものとして作用するという考え方である。したがって、この観点からすると「日本人論」の著者や「日本的自我」の著者全てが、彼らの社会的な立場を強化するイデオロギー的な著作物を生み出し続けるという行為を無批判かつ無自覚に続けており（「反映」、彼らの著作物はすべてが一様にイデオロギー的であるということになる。

しかしながら、このような構造決定論に対しては1970年代後半以降、さまざまな立場から疑問が提出されてきた。セクションIVで見たように、新しい文化人類学は理論的に文化

研究 (cultural studies) の影響を強く受けており、その動向を参照しているが、文化研究におけるオーディエンス研究は構造決定論批判の最たるものである。また、新しい文化人類学の動向で重視されているブルデューなど社会学的な立場からの議論も完全な構造決定論には否定的であり、エージェンシーをどのように理論的に指定するかについて議論してきた。エージェンシーの問題はマルクス主義的なイデオロギー論における構造決定への批判という理論的背景があり、文化研究のオーディエンス論にみられるように「社会的弱者」の問題として議論される傾向にある (Radway 1984; Bobo 1988)。しかしながら、エージェンシーの問題は、社会的立場に関わらずあらゆるカテゴリーの人々に本来当てはまるはずである。この「語り手」の問題化のように、あるカテゴリー (この場合「日本人論」の著者や「日本的自我」の著者) の人々全てが無自覚に権力関係を反映した言説を生み出し続けるという想定は、他者のエージェンシーをあまりにも過小評価しているのではないだろうか。

③大衆文化としての「日本人論」

「日本人論」に対するよくある批判として、それがマス・マーケットで売れた大衆文化であるからという議論がある。ポピュラーであるためには読者の好みに応える必要があり、必然的に学問的な中立性を失うという議論である。そして戦後の日本の読者の「不安」を癒すというマーケットの要請から、集団アイデンティティを確認可能にするような「日本人論」が続々と書かれ、読まれたのだという議論である。この議論では、「ポピュラーなもの」と「アカデミックなもの」という二項対立が議論の前提となっている。そして前者 (ポピュラーなもの) は「客観性」を欠き、後者 (アカデミックなもの) は「客観性」を持っているとみなされている。しかしながら、このような二項対立はこれまで問題にされてこなかったか？

ポスト植民地主義批判が問題にしたのは、まさに学問的中立性という形で正当化された文化人類学の学問的権威だったはずである。また、フェミニズムによる一連の批判 (Haraway 1991; Butler and Scott 1992) やブルデュー (Bourdieu 1977; Bourdieu 1991) など、¹³⁾「学問的客観性」は社会的に構築された価値であり、それは特定の社会集団を排除することによって独占されてきたことを指摘している¹³⁾。ポピュラーであるために読まれる価値がないという断定は、上記と同様の二項対立による排除の図式を踏襲していると考えられないだろうか？

2. 「自我」の議論とそれ以降の文化人類学の議論は排他的か？

前節では、ポスト植民地主義や文化ナショナリズム批判など「日本的自我」に対して批判的な議論が、それ自体矛盾点を多くはらんでおり、「日本的自我」という研究全体を否定するには不十分な論拠しか持たないことを確認した。本節で問いたいのは、新しい文化人類学的アプローチと、「日本的自我」の研究やそれ以前のアプローチは本当に排他的な関係にあるのかという

点である。セクションIVで見たように、日本を対象とした新しい文化人類学や周辺領域においては「日本文化」というカテゴリーを脱構築するなど、文化を政治経済的なプロセスにオープンなものとして位置づける傾向が強まっている。対象とされる「文化」もメディアや消費文化など、それ以前の文化人類学が対象としなかった産業化以降の文化を分析する場合も多くなっている。これと反比例して、セクションIIで見た「日本的自我」の議論やそれ以前に行われた伝統的な文化人類学的な手法への関心は失われつつある。「日本的自我」の議論、特にバチニクらの「相対的な丁寧さの度合い」が対象としてきた言語使用に密着し、言語使用と相互作用の結びつきを分析するようなミクロレベルの研究は見られなくなっている。また日本の相互作用における「相対的な丁寧さ」のインデックス的な観点からの分析は、その後ほとんど進んでいない¹⁴⁾。ポスト植民地主義や文化ナショナリズム批判の影響を受けた新しい文化人類学は、「日本的自我」の議論やそれ以前の「本質主義的」な文化人類学的アプローチとは相いれないものであることを強調してきた。しかしながら、この両者は本当に排他的な関係にあるのだろうか？以下の2点から、この問題を考えたい。

①「共有されたもの」としての文化と「強制されたもの」としての文化

「日本的自我」やそれ以前の文化人類学的な議論と、「自我」以降の文化人類学的な議論では、「文化」という概念のとらえ方が大きく異なっている。「自我」やそれ以前の議論では、文化は共有された解釈枠組みであり、集団のメンバー間での意思疎通を可能にし、ひいては「秩序」をもたらすものである。集団のメンバー間で言語、規範、価値観などが（ある程度）自明の生活習慣として共有されることによって、その集団内では意思疎通が可能になり日常生活を成立させることができる。このため言語構造や言語使用、相互作用の構造化のされ方を観察し、その中で共有される解釈枠組み（日常世界に対する共有された意味づけのしかた）を理解することが伝統的な文化人類学では重視されてきた。ルールや規範が共有されることによって秩序が成立するという観点である。

これに対しポスト植民地主義やナショナリズム批判が強調したのは、「強制されたもの」としての文化である。これらの批判的議論が問題としたのは、文化を「共有されたもの」として語る時、それが「どの範囲」の人々に、「どの程度」共有されているかが十分に議論されない傾向にあったという点である。このため、一部の人々の行動の観察から「日本文化」全体を語るという問題が起きてきた。これは先にみたように、方法論的に考えると「過度の一般化」である。ポスト植民地主義批判などでさらに問題とされたのはこの一般化により当該集団が超歴史的に同質的な集団であるとみなされ、その中で権力関係など差異が不可視になるという点である。このような観点から、文化を「共有される」ものでも、ある集団から他の集団へ「強制されるもの」として捉える傾向が強まってきた。そして「共有されたもの」として文化を語る行為そのものを問題視し、そのイデオロギー性を暴くことが重視されてきた。文化の「強制」を強調する議論では、文化とは不平等な社会関係を自明視させ、維持する働きをもつものであると定義されている。すなわち、文

化とは政治経済的関係が構築・維持されるための「イデオロギー」的な枠組みとして、もしくはジェンダー、人種、民族などのアイデンティティが構築される「主体効果」(subject effect)を可能にするイデオロギー的機能として、社会の権力関係の一部であると考えられてきた。

しかしながら、この2つの文化に対する考え方は本当に両立しないのだろうか？意思疎通を可能にする「共有」された解釈枠組みとしての文化とイデオロギー的な働きをする「強制」されたものとしての文化とは、本当に排他的な関係にあるのだろうか？前者を「本質主義」的であると批判する議論は、前者が対象とする言語行為を含めた日常的な相互作用などは分析の対象としない傾向が強い。しかし、日常的な相互作用を観察することは、必ずしも権力関係を無視することにはならないはずである。ミクロ社会学やその影響を受けたギデンス、ブルデューの研究で説明されているように、私たちは社会の様々な規範を強制され内面化する受動的な存在というよりは、「強制」された規範自体を何らかの形で対象化し語っている。たとえば、「丁寧さ」を例として考えるなら、「バイト敬語」や「敬語が使えない新入社員」など、日本では様々な形で「丁寧さ」の使用を問題化する言説が生み出され、「丁寧さ」のあるべき姿について語られ続けている。人々は「共有されるべき丁寧さ」とは何かについて定義し、その文化的特徴を「共有しない」とみなした個人や集団を排除することもある。この意味で「強制されるもの」としての文化を日常的な観察から考えることは可能である。

「丁寧さ」の問題化にみられるような日常的なレベルで行われる排除行為は、行為者にとって半ば身体化された行動様式からの「ズレ」を言語化し問題化する場合が多い。このような観点から「丁寧さ」を分析する上では、「丁寧さ」の基準の変化を歴史的な観点から分析することはもちろん重要である。また、現在「丁寧」であると考えられているような一連の行動パターンが、歴史的にどのように形成されてきたのかを分析することも重要であろう。しかしながら、歴史的な観点から「丁寧さ」を「脱自然化」(denaturalize)すれば、「丁寧さ」に関する言説がなくなるということはおそらくない。それは、「丁寧さ」の使用が、日常的な相互作用のあり方の根本にかかわる習慣であり、社会関係の意味づけに大きな役割を果たしているからである。

この意味で、「文化」に関する問題をすべてイデオロギー的な理念的構築物の「強制」として扱うような議論は、言語実践など様々なレベルで起こる相互作用や解釈のプロセスなど文化の「共有」にまつわる問題を単純化しすぎていると思われる。文化を権力関係によって「強制」された理念的構築物としてとらえる観点は、日常的な相互作用などを文化から「自由」な領域として暗に想定する傾向にあり、「強制」からの「解放」を著しく単純化した形で想定した議論を生み出す可能性もある¹⁵⁾。セクションⅡでみた「日本の自我」の研究で提出された観点によると、言語使用を含む日常的な相互行為において、文化の「共有」は制約的かつ規定的に作用すると同時に、状況的な行為や意味を新たに生成し続けることを可能にする。理念的構築物として対象化された次元の文化を分析することも重要であるが、

文化を規定的かつ生成的な両面性を持つ社会实践として捉える視点も必要であろう。上記の「丁寧さ」の例でみたとおり、この二つの観点は決して排他的ではないはずである。

②言語観の違いについて：「メッセージ」としての言語と「行為」としての言語

文化人類学における「日本的自我」の議論およびそれ以前の議論においては、言語習得を必須とした長期的な参与観察に基づいた、ミクروسケールの文化の「全体的」な記述が重視されていた。文化を閉じた自律的な領域にとらえ、言語の構造や言語使用、行動規範、価値観、慣習など「生活全体のあり方」(whole way of life)を記述し、その文化を生きる人々の思考法、すなわち「現実」に対する解釈枠組みを観察者が再構成することを重視していた。これに対し、新しい文化人類学の議論では、文化という領域をこれまで分析の対象外にあった政治経済的なプロセスの一部として概念化する傾向が強まっており、従来の長期的な参与観察で重視された言語習得を基本としたマイクロレベルの綿密な分析の比重は軽くなりつつある。先に見た現在の日本を対象とした文化人類学の4つの傾向で考えると、消費文化の研究のように一般的な人々の消費行動や商品の使用を通じた日常生活における意味の生成を観察する場合、観察対象となる消費行動は商品生産のプロセスから切り離すことはできない。この意味で消費文化を研究することは経済的なプロセスの分析と明らかにリンクしている。また植民地化の歴史という観点からマイノリティ文化を研究する場合、植民地化やマイノリティの周縁化という政治的なプロセスが「マイノリティ文化」の定義そのものにいかにかかわっているかに焦点が当たる傾向にある。

しかしこの両者は本当に排他的な問題として考えられるべきなのであるか？例えば消費文化の分析において、新しい文化人類学では(a)消費動向の変化などマクロな歴史的变化と(b)消費のターゲットとなっている集団自体が消費行動に対してどのような意味づけを行っているかという解釈枠組みの、2つのレベルの分析を行う傾向にある。この場合、「解釈枠組み」の問題はインタビューで調査されることがほとんどであり、インタビューを英語ないし他言語に翻訳したものが調査の「結果」として示されることになる。インタビュー調査が多用されることの問題は、インタビューでは言語を「メッセージ」を伝える透明な媒体みなし、明示的な指示対象を持つ言語的側面に注目する傾向にあるという点にある。このため、相互作用の中で私たちが言語を通じて何を「する」のかという行為の側面には注意が払われにくくなる。セクションⅡで紹介したような言語使用と相互作用の関係など、発話が起きる状況全体の分析はインタビュー調査では重視されない傾向にある¹⁶⁾。

セクションⅡで紹介した「相対的な丁寧さの度合い」を含めた言語のインデックス性は、相互作用と言語との関係を扱う概念である。インデックスとは言語を相互作用の中に位置づける働きのことであり、直接的な言明ではない形でコンテキストの中で指示対象(意味)を構築し、相互作用における行為者間の関係を定義づけるよう作用する。たとえば「丁寧さ」という観点からインタビュー調査の過程を考えると、インタビューを行っている調査者とインタビューを受ける側との関係や、インタビューの中で言及される第三者への距離感が、

「丁寧さ」を通じて分節されている可能性は大きい。そして、そのような「丁寧さ」による距離によって、関係のあり方（集団内／外、上下など）に対する話者にとっての意味付けが、重層的に言及されている場合も多いのである。このようなコンテキスト内での意味は、発話の「内容」（明示的な指示対象）の分析にフォーカスを置くインタビュー調査では見落とされがちである。インタビュー調査の重視は、それ自体がある種の「言語イデオロギー」（Silverstein 1991）に基づいている。インタビュー調査自体は方法として重要であるが、言語使用と相互作用のコンテキストの結びつきを分析するための概念ツールを持たないと、非常にナイーブな分析に終わる可能性がある。この意味で、「相対的な丁寧さ」の議論で重視された言語構造、言語使用、そして相互作用の結びつきの分析は、新しい文化人類学におけるインタビュー調査を重視した「解釈枠組み」の分析と排他的であるとみなす必要はないのではないだろうか。

VI. おわりに

文化人類学的な「自我」の議論は、「人格」／「自我」という二項対立的な区分が、西洋の伝統的な価値観に根差していることを問題化した。そして、「人格」／「自我」という二項対立を想定しない形で、「心理領域」をそれぞれの文化のありように沿って概念化し記述することを目指していた。日本を対象とした文化人類学における「自我」の議論では、このため「人格」という概念と密接に結びついている「価値の内面化」という前提をカッコに入れ、相互作用そのものをいかに記述するかに焦点を当てることになった。本論で紹介した「相対的な丁寧さの度合い」は、このための概念ツールである。「相対的な丁寧さ」では、言語使用を相互作用のコンテキストに位置づけることで、行為者間の社会的距離がどのように分節され、意味づけられていくかに着目した。そして綿密な観察を通じて、「丁寧さ」の使用が、「内面化」された社会的役割関係の単なる「反映」ではなく、行為者がお互いの距離を位置づけあうための、状況的な判断を伴った行為であることを示した。

セクション III で見たように、文化人類学的な「日本的自我」に関する研究は、ポスト植民地主義や文化ナショナリズム批判の立場から否定され、その後は「日本的自我」の観点からの研究はほとんど続けられていない。確かに「日本的自我」の研究は「心理領域」の文化固有な概念化を想定しており、アメリカ的な文化人類学の文化相対主義の伝統の中にある。「日本的自我」の議論が行った、西洋的なカテゴリーを非西洋の文化に押し付けることへの非難は、西洋と非西洋の文化の排他性を強調する「他者化」を行っているといえるかもしれない。しかしながら、この議論自体の目的は、「人格」／「自我」および一連の二項対立がいわゆる「西洋人」の価値観を構成していることを示すことではない。議論の中でそのような傾向が一部にあったとしても、「人格」／「自我」という二項対立に基づいたカテゴリーを、観察対象の社会に押し付けることを戒めたという意義はこれまで見たように大きかった。このような点を見無視して、この枠組みの議論を「他者化」もしくは文化ナショナリズム的であると切り捨てるのは、あまりにも

一面的な批判ではないだろうか。

「文化」の定義は様々であり、規範、価値観、生活様式、解釈枠組み、消費文化、メディア、など何に焦点を当てるかによって議論の仕方も大きく変わる。しかしながら、根本的な問題として、一定の範囲の人々にある程度共有されるものとして文化を想定しない限り、文化を概念化しモデル化することはできない。セクション III で見たポスト植民地主義批判や文化ナショナリズム批判は、文化が集団全体に共有されるという前提によって、文化や集団が超歴史的な存在として想定されるようになることを批判していた。文化が「どの範囲」に「どの程度」共有されるかについての十分な議論がないため、「日本」という国家や領土の歴史性および人工性を無視し、「日本文化」というカテゴリーを「自然」で自明なものとして取り扱ってきたことを問題としてきた。この批判は当然であろう。しかしながら、ある社会集団に属する人々の行為の綿密な分析を行おうとすると、どうしても「共有されたもの」としての文化を考える必要が出てくるのである。そして文化をモデル化しようとする場合、ある一定の範囲の人々に、ある一定の形で文化が共有されることを想定する必要が出てくる。「文化の共有」という想定によっておこる本質主義の問題は、どの範囲（もしくはレベル）の集団を想定しても、上記と同様の問題が起こりうる可能性があり、相互行為を説明しようとする際には避けて通ることはできないのではないだろうか。

本論で見たように、「共有されたもの」と「強制されたもの」という二つの文化に対する観点は排他的なものではない。「日本的自我」に対する批判がこれまで繰り返されてきたため、様々な二項対立が調停不可能であるとみなされるようになってきた。しかしながら、排他的な二項対立を措定し「日本的自我」の研究を批判し続けることは、本論でみたとおり現在の文化人類学の動向に対して必ずしも良い影響を与えていない。「他者化」や「文化ナショナリズム」の名のもとに言語使用と相互作用の関係に関するこれまでの研究の蓄積を排除することが、日本を対象とした新しい文化人類学の分析において共通した「甘さ」を生み出していることは否定できないだろう。このため、本論は「日本的自我」対「新しい文化人類学」という二項対立を成立させてきた一連の議論を再考し、より大きな理論的コンテクストの中に位置づけなおすことを試みた。本論が対象とした論争は批判的議論全体の一部であり、概念整理としてはまだまだ不十分である。さらなる論点整理が必要であろう。

注

- 1) 文化人類学が心理領域をどのように対象化してきたかについては LeVine (2010)。
- 2) このような「社会対個人」という二項対立的な議論に対し、マイクロ社会学（アメリカで言う「社会心理学」）がより中間的な分析モデルを提出しているのは周知のとおりである。しかしながら、ミード以降議論された generalized other などのモデル自体も「理性的」な西洋的個人を前提としたものであると、フェミニストから批判されてきた。
- 3) バチニクはパース的な記号論、特にインデックスという概念を日本の相互行為の分析に応用している。また彼女は親族関係の分析においても優れた業績を残している。コンドーはポスト構造主義、ポストモダ

- ニズムやフェミニズムの議論と「日本の自我」の議論の接合を行っている。
- 4) 「丁寧さ」(politeness) という概念は、上下関係における「敬意」というニュアンスを強く含んだ「敬語」という概念より中立的であり、水平方向の関係にも言及できるため使用されるようになった。日本における社会言語学では、「接遇表現」という概念が使用されるようになってきているが、これは「丁寧さ」にほぼ対応している。
 - 5) Bachnik (1992) などが提示した日本の相互作用におけるインデックスの解釈は、一般的に言語人類学などで議論されているインデックスの解釈よりも「構築主義的」であるといえるだろう。バチニクらは「丁寧さ」を通じて、行為者がお互いの「丁寧さ」の度合いを「測る」こと、さらに行為者が互いの位置関係に意味づけを行うことを強調している。より一般的なインデックスの解釈は、客観的な社会関係（社会的地位、階級など）をインデックスが「反映」しているというものである (c.f. Ochs 1990)。
 - 6) Bachnik (1992) は、「丁寧さ」の比較は、理論的には無限の可能性があるにも関わらず、相互作用においてある種の秩序 (order) が可能になるのはなぜかと問うている。この問題意識から、彼女や同時期の論者は、相対的な「丁寧さ」の比較がどのように相互作用において組織化されるかに焦点を当てた。Kondo (1990) は、「無限の比較」の可能性が閉じ、関係が比較的安定した形で構造化されるあり方を、権力の問題として分析している。
 - 7) このような戦後の「西洋」との比較をベースにした日本論以外に、戦前からの民俗学および主に戦後の社会学が日本社会を対象とした学問として存在しているが、文化人類学者によく読まれることになったのは、この「日本人論」として現在分類される領域である。
 - 8) 日本においては、現代の日本社会を研究するのは欧米の概念枠組みを参照する社会学であり、日本文化の原型（農村の「常民」）を研究するのが民俗学であるという学問的役割分担が存在してきた。これに対し、日本における文化人類学は日本以外の非西洋社会を対象としてきた。「日本人論」は現代社会におけるミクロレベルの人間関係の特徴を当事者（内部者）の観点から再構成することを目的としており、上記の図式には位置づけにくい学問的関心を持っていた。この関心のあり方が、日本を対象とする文化人類学 (Japan Anthropology/ Anthropology of Japan) と共通していたため、「日本人論」というジャンルと日本を対象とする文化人類学の交流が生まれたと思われる。
 - 9) このジャンル全体に共通する本質主義という「欠陥」の直接的な原因は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』に由来すると考える論者もいる (Robertson 2005)。ベネディクトは「日本文化」を西洋、特に当時のアメリカ文化と全く相いれないものとして位置づけた。ベネディクトの『菊と刀』は戦後の日本でベストセラーとなり、彼女に対する批判が「日本人論」的な議論の出発点となった。この過程で、彼女が設定した「西洋の鏡像としての日本文化」という枠組みは、これ以降の議論に引き継がれることになったのである。
 - 10) 日本人論の論調を見ると、1960年代ごろの比較的初期に書かれたものが価値中立的、ないし日本の「悪い点」を強調が目立つのに対し（「ムラ社会」など）、経済成長によりアメリカなどに「脅威」とみなされるようになった1980年代には日本文化の「良さ」や「優秀性」を強調するものが目立つようになっていく（青木 1990）。
 - 11) これらの「日本文化」というカテゴリーを問題化する議論自体にもアプローチには大きな違いがあり、(c) のポストモダニスト的な言説分析は (a) の「伝統の発明」のような文化論批判に対しては懐疑的である (Sakai 1997)。
 - 12) 比較社会的なアプローチとコンテクスト重視を両立した例外的な分析としては Hendry (1993) がある。
 - 13) 私がフェミニストやブルデューの議論を引用するのは、それが絶対的に「正しい」からであるというよりは、ポスト植民地主義や文化ナショナリズムの観点からの批判が当然参照すべきだからである。すなわ

ち、後者（批判的議論）は前者を理論的なマトリックスとして共有しており、それを議論の前提の一部として取り込んでいるにも関わらず、「日本的自我」の批判においてはこのような観点に言及されないのである。

- 14) インデックス的な観点からの「丁寧さ」の新しい分析は、筆者が知る限りでは、筆者のもの（Iida 2008; 飯田 2010）のみである。「丁寧さ」の分析自体は、社会言語学的な観点から行われることが多くなっている。インデックスという概念も使われることがあるが、バチニクらの定義とはかなり異なっている。社会言語学的な「丁寧さ」の議論では、主に日本語での「丁寧さ」の規範とは何かをインタビュー調査などで調べ、日本語以外での「丁寧さ」の規範との比較を行っている。文化人類学的な「自我」の議論のように、言語使用を相互作用の場の中に位置づけて分析することはほとんど行われていない。社会言語学における「丁寧さ」と文化人類学における「丁寧さ」のアプローチの違いについては、Iida (2008)。
- 15) この問題が、現在文化研究という研究分野の崩壊をもたらした一因であると考えられている。文化研究ではオーディエンス調査により、メディアなどを通じた「イデオロギーの内面化」が、研究者が想像していた形では起きていないことが確認された。このため、「オーディエンスが解放されている」というそれ以前とは論旨が逆転した議論が盛んになり、オーディエンスおよび消費者のエージェンシーが著しく賞揚されることになった。このような単純化された議論が起きる原因は、「文化」および「解釈」の問題が、「イデオロギー」を鵜呑みにするかどうか、という二項対立として設定されているからであろう。
- 16) これはもちろん、すべてのインタビュー調査がこの傾向を共有しているということではない。ゴフマンなどの観点を取り入れ、言語使用を相互作用の中に位置づけながらインタビュー調査をする流れはむしろ主流になってきている。しかしながら、調査対象者のインタビューを他言語に翻訳することを前提とした文化人類学のインタビュー調査では、言語使用をクローズアップで分析する概念ツールを持たない場合、どうしても「メッセージ」レベルへの着目が中心となる傾向が強くなる。

参考文献

- Allison, Anne. 1996. *Permitted and Prohibited Desires: Mothers, Comics, and Censorship in Japan*. Boulder: Westview Press.
- Benedict, Ruth. 1989. *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Bachnik, Jane. 1992. "Kejime: defining a shifting self," in N. R. Rosenberger, ed., *Japanese Sense of Self*, 152-172. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bachnik, Jane and Charles J. Quinn Jr., eds. 1994. *Situated Meaning: Inside and Outside in Japanese Self, Society, and Language*. Princeton: Princeton University Press.
- Bobo, Jacqueline. 1988. "The Color Purple: Black Women as Cultural Readers." In E. D. Pribram, ed., *Female Spectators*.
- Bourdieu, Pierre. 1977. *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1991. *Language and Symbolic Power*. Cambridge: Polity Press.
- Butler, Judith P., and Joan W. Scott, eds. 1992. *Feminists Theorize the Political*. New York: Routledge.
- Clifford, James, and Marcus, George E., eds. 1986. *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press.
- Denoon, Donald, Mark Hudson, Gavan McCormack, and Tessa Morris-Suzuki, eds. 1996. *Multicultural Japan: Palaeolithic to Postmodern*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Duranti, Alessandro. 2001. "Linguistic Anthropology: History, Ideas, and Issues." In Alessandro Duranti, ed., *Linguistic Anthropology*, 1-38. Malden: Blackwell.
- Duranti, Alessandro. 2001. *Linguistic Anthropology: A Reader*. Oxford: Blackwell.
- Duranti, Alessandro, and Chalres Goodwin, eds. 1992. *Rethinking Contexts: Language as an Interactive Phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haraway, Donna J. 1991. *Simians, Cyborgs, and Women: Reinvention of Nature*. New York: Routledge.
- Hendry, Joy. 1993. *Wrapping Culture: Politeness, Presentation, and Power in Japan and Other Societies*. Oxford: Clarendon Press.
- Hendry, Joy, and C.W. Watson, eds. 2001. *An Anthropology of Indirect Communication*. London: Routledge.
- Iida, Miki. 2008. *More Polite/ Less Polite: The Discourse of Politeness in Japanese Interaction*. Ph.D. Dissertation, presented at State University of New York at Buffalo.
- Inamura, Anne E. ed. 1996. *Re-Imaging Japanese Women*. Berkeley: University of California Press.
- Ivy, Marilyn. 1995. *Discourses of the Vanishing: Modernity, Phatasm, Japan*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kondo, Dorinne. 1990. *Crafting Selves: Power, Gender and Discourse of Identity in a Japanese Workplace*. Chicago: Chicago University Press.
- Kumagai, Hisa. 1981. "A Dissection of Intimacy: A Study of Bipolar Positions in Japanese Social Interaction, Amaeru and Amayakasu, Indulgence and Deference." *Culture, Medicine, and Psychiatry* 5 (3) : 249-72.
- Lebra, Takie Suguyama, and William P. Lebra, eds. 1986. *Japanese Culture and Behavior: Selected Readings*. Revised edition. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Lie, John. 2001. *Multi-Ethnic Japan*. Cambridge: Harvard University Press.
- LeVine, Robert A. 2010. *Psychological Anthropology: A Reader on Self in Culture*. Malden: Blackwell.
- Millar, Laura. 2006. *Beauty Up: Exploring Contemporary Japanese Body Aesthetics*. Berkeley: University of California Press.
- Miyoshi, Masao. 1991. *Off Center: Power and Culture Relations between Japan and the United States*. Cambridge: Harvard University Press.
- Moeran, Brian. 1996. *A Japanese Advertising Agency: An Anthropology of Media and Markets*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Nakane, Chie. 1970. *Japanese Society*. Berkeley: University of California Press.
- Ochs, Elinor. 1990. "Indexicality and Socialization." In J. W. Stigler, R. A. Sweder, and G. Herdt, eds., *Cultural Psychology*, 287-308. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pribram, E. Deidre, ed. 1988. *Female Spectators*. New York: Verso.
- Radway, Janice. 1984. *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Rees, Tobias. 2008. *Designs for an Anthropology of the Contemporary*. Durham: Duke University Press.
- Robertson, Jennifer. 1991. *Native and Newcomer: Making and Remaking a Japanese City*. Berkeley: University of California Press.
- . 1998. *Takarazuka: Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Robertson, Jennifer, ed. 2005. *A Companion to the Anthropology of Japan*. Malden: Blackwell.
- Rosenberger, Nancy R., ed. 1992. *Japanese Sense of Self*. Cambridge: Cambridge University Press.

- . 1994. "Indexing Hierarchy through Japanese Gender Relations." In J M. Bachnik and C. J. Quinn, Jr. eds., *Situated Meaning*. Princeton: Princeton University Press.
- Sakai, Naoki. 1997. *Translation and Subjectivity: On Japan and Cultural Nationalism*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Silverstein, Michael. 1991. "The Limits of Awareness." In A. Duranti, ed., *Linguistic Anthropology*, 382-401. Malden: Blackwell.
- Skov, Lise, and Brian Moeran, eds. 1995. *Women, Media, and Consumption in Japan*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Smith, Robert J. 1983. *Japanese Society*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stigler, James W., Richard A. Sweder, and Gilbert Herdt, eds. 1990. *Cultural Psychology: Essays on Comparative Human Development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Suzuki, Takao. 1986. "Language and Behavior in Japan," in T. K. Lebra, and W.P. Lebra, eds., *Japanese Culture and Behavior*, revised edition, 142-157. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Vlastos, Stephen, ed. 1998. *Mirror of Modernity: Invented Traditions of Modern Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Weiner, Michael, ed. 1997. *Japan's Minorities: The Illusions of Homogeneity*. New York: Routledge.
- 青木保 1990 『「日本文化論」の変容』中央公論社。
- 飯田未希 2010 『「相対的丁寧さ」と分業：関西の美容室での観察から』、『比較文化研究』no. 92、pp.1-12.
- 小森陽一・高橋哲哉編 1998 『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会。
- 土居健郎 1971 『「甘え」の構造』弘文堂。
- 1985 『表と裏』弘文堂。
- 中根千枝 1967 『タテ社会の人間関係』講談社。
- ベフ、ハルミ 1987 『イデオロギーとしての日本文化論』思想の科学社。
- 吉野耕作 1997 『文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会。
- 吉見俊哉 1998 「雑誌メディアとナショナリズムの消費」、小森陽一・高橋哲哉編 『ナショナル・ヒストリーを超えて』、pp.195-212.